

竹田聴洲著

「民俗仏教と祖先信仰」

柴田實

今日わが国の仏教はしばしば葬式仏教と評せられる。その意味はいうまでもなく、いずれの宗派を問わず、僧侶はただ死人の葬式を執り行なうか、もしくはその年回法要に導師となるだけであることを諷したもので、その然るゆえんは仏教寺院が各個人の信仰如何にかかわらず、普通檀家とよばれる家々と密着して、永続的な関係を結び、各家々の墓碑や位牌を擁してその祭祀供養を行なう場となっているがためである。そしてそのような寺檀関係の成立は一般に説かれているところによれば、近世のはじめキリシタン禁制の意図から制定された宗判寺請制度の結果であって、近世の仏教はそのような権力の保護に押れてもはや鎌倉仏教に見られたような宗教的生命を失い、葬式仏教に墮落するに至ったなどという風に論じられる。しかしながら幕藩制の崩壊してすでに百年余の今日、都鄙を問わず依然として固く結ばれて、各宗派(教団)ともその権立のもっとも実質的な支柱としている寺檀関係、ならびにその上に営なまれる祖先(先霊亡魂)の祭祀儀礼が、果してよくだ一時の便宜的政策によってもたらされたものとして、十分に諒得せられるであろうか。それは必ずしも深く仏教自体を

受け入れたわが国常民の社会のあり方、その村や家の構成と、それが固有する祖先信仰の民俗に付来するものとして理解されねばならない。早く昭和三十二年ころ「祖先崇拜——民俗と歴史」並に「日本人の信仰」(高取正男氏と共著)の二著を著わして包括的にそのことも示唆していた竹田聴洲氏は、その後十数年の歳月を、その論旨の実証と論理の補強のため、老大な資料の蒐集とその整理分析に費して、このほど標記のごとき大著を学位論文として完成・公刊された。

本書は右に述べたような仏教と祖先信仰との癒着の根本的因由を究明するために、まずそのもっとも明瞭な結節点をなす一般民間の寺院(いわゆる檀那寺)は、いつ、どのようにして成立したか、第二、その寺院との密接な関係のもとに全面的に仏教的色彩を帯びて維持されている祖先信仰の直接対象となっている墓碑はいつどのようにして今日見られるごときものとなったか、の二点に問題をしばって、一面では全国にわたる大量事例を統計的に処理してその一般の傾向をつかむとともに、他方においては二、三の特定地域を選び、その歴史的特殊性に即しつつ、徹視的観察をつづけ、これをさきの一般的考察に照合して、最終的結論——歴史的事実の証明とその民俗的意味の解釈——を導き出している。

すなわち第一の問題については浄土宗において元禄年間全国の門末寺院について実施した由緒調査の書上げ「蓮門精舎旧詞」に着目して、その内容の徹底的吟味分析に当った。この書は浄土一宗の寺院のみに限られているとはいひよう、北は陸奥から南は薩摩まで地域的には真に全国にわたって六千有余の寺院を網羅し、調査者の趣旨にもとづく一定の規格に従って各寺院開創の由緒を

述べているので、今日各地に存する民間寺院（檀那寺）の一般的成立時期とその要因を問題とする著者にとってはまことに恰好の資料であった。その内容は各寺院がそれぞれにみずから伝えるところの由緒を記したものであるから、それがそのまま歴史的事実であるとは限らぬことはもとよりながら、著者はその所伝をいとおうそのままに受取ってこれを通覧し、そこにまず開創以来、連綿元禄当時まで相伝えて単一の歴史を有する比較的少数の寺院の外に、往昔開基の後、別にまた中興開山なるものを挙げて、いわば前後二度の開創のあったことを伝える寺院の多いことに注意しつつ、その開創年代を年表の上に位置づけていくときその分布が文亀から元亀に至る約七十年間、ならびにそれにつづく天正から寛永までの同じく約七十年間にとくに密であつてその前後に粗であることが全国を通じていいうることを表示する。次に寺院の開創にはひとりその開山僧侶のみならず必ずこれに結びついた外護檀越の存立が考えられねばならないが、それが特定の個人であるかもしくは集団（郷村）であつたか、また個人としてもそれが公家・將軍・大名・領主のごとき身分か、単なる地侍的武士か、はまた一庶民かの別が吟味さるべきであり、それ以上にその動機如何が問題となる。著者はやはり各寺院の所伝にもとづいてその動機をいちおう十種にまで細別した後、檀越の身分の上下もしくは単独集団の別なく、その圧倒的多数が先霊亡魂^レ先祖の菩提所・牌墓所もしくは葬所として創められたものであることを確認する。

寺院の開創といつても、あえて七堂伽藍はさておき本堂・庫裏・山門・鐘樓等の堂宇が一時に建立されるといふのではなく、多くは山堂草庵がもとになつてそこに看坊・留守み・勸進聖の類が居

つき、次第に寺院の形態を整えて行つた場合が少なくなく、それだけにその宗旨や儀規にも純粋性を欠き、元禄当時浄土宗として登録されてありながら、その前史においては異宗であつたことを公言しているものも多く見出される。また鎮守の神祠やその他の俗信と習合してその由緒を語り伝えているものも稀でない。そのいずれの場合においても、そのようなことの起こりうべき理由は何であつたか、著者は一々の場合をたんねんに吟味しつつ最後に寺と墓との癒着がどうして起こつたかを論ずる。その場合墓はもとよりただ石碑のことではなく、それ以外の種々の形態が考えられるが、基本的には民俗学においていわゆる埋墓（遺骸埋葬地）と詣墓（靈葬祭祀地）との二側面のあることが留意せらるべく、遺骸を伴わずもっぱら霊の供養を主とする詣墓の意義を拡充すれば菩提所としての寺は、それ自体が詣墓と見なさるべきで、寺と墓との關係は墓が先で寺（堂）が後の場合と、寺が先で後に墓が営まれた場合と現実にはその両様がありえても、事理的には前者が後者に先行すべきであると著者はいう。そして墓をとくに石碑と限るとき、上述の資料において元禄当時、一般寺院の中に存した石碑のもつとも古いものは永正・享祿・天文から天正期のものであることにいちおう注意した後、著者はその第二の問題（後編）村における墓と寺との史的成立關係の論に移る。

この編は奈良県山辺郡都介野村の大字来迎寺并に吐山、および京都府北桑田郡山国村大字中江という三つの部落においてそれぞれそこに現在存するところの墓地とその石碑およびそれに関連ある寺院とその檀家（住民）をば悉皆あますところなく点検調査してその村における墓と寺との史的関連を追究したもの、これら三か

所の村はそれぞれその成立事情を異にし、それに応じてその構造・性格も違つて居り、従つてまた当然その寺と墓との成立関係も異らざるを得ない。著者はあくまでその現状に即しつづつ(いいかえれば現状の観察と聴取をともとしながら)、その差異の由つて来るところを遡源的に追求するのであるが、これをやや類型的にいえば中世以来名主・地侍的富家を中心に成立した同族部落と、より多く地縁的契機によつて結ばれた講組的部落(垣内)との二種となる。石碑は前者の場合特定個人の名を刻した供養碑として、後者ではむしろ無銘の、もしくは講中、垣内中建立の、惣墓としてともに中世後期からその姿を村内に現わすが、後者にはより古く村堺路傍にまつられた塞神や地蔵尊の性格が強く、寺は前者の場合本家筋の持庵(氏寺)の形をとり、後者の場合村惣堂(垣内寺)として存立するという風に概括することもできようか。ただし現実の村はいうまでもなく歴史的に変貌し家々にも隆替があつて、寺と墓との関係はもとより一様に律せられない。著者はもちろんそうした個別的要因とそれにもとづく具体的な特徴についても実に綿密な考察を行なっているが、村における墓碑の建設と、寺院の開創とがともに中世末期から近世幕藩体制成立期にわけて見られるという、本書によつて実証せられた事実がより広く日本歴史全体の中でもそもそ何を意味するかについては、あえて何ごとをも言おうとしてはいいない。おそらくそれは著者の今後の研究に課せられた大きな課題となるものであらう。

なおそれ以外にも読過の間に筆者の脳裏をかすめたいくつかの

望蜀の感を書きつけおくとすれば、著者は直接現在につながる中世末以来の寺と墓(石碑)とを問題とするが、然らば古代においてはいかがあつたか。推古紀に「是の時に諸臣連等各君親の恩の為に競ひて仏舎を造る、即ち是を寺と謂へり」とある、寺とはそのはじめから菩提寺であつたのか。

寺と墓との癒着は仏教自体あるいはその宗旨(教理)とは無関係というが、墓碑以前の形態として法華堂の造立はかが解すべきか、図示された中世の碑石に多く阿字が刻されているのは何を意味するか、五輪塔造立の意味(近世にそれがすたれて方柱型碑が一般的となつたのはなぜか)等々数多くあるであらう。

さもあらばあれ本書の主題は、著者みずからががつて十余年の間丹波の一寒村の檀那寺に住持としてつぶさに体験せられたところから生れたといわれるが、著者がその解決のために示したひたむきな熱意と、龐大な資料の整理と分析のために投入したエネルギーの巨大さはまことに瞠目すべきものであり、総計二五〇にも上る図表と付論四編をも併せて全冊千二百余ページにも達する巨冊はかりそめに通読してその印象を語るのみでは尽くされない重みがあり、歴史学とか民俗学とかはたまたま仏教学とか、既成の学問分類にとらわれず、ひろく日本の基層文化、その信仰や社会、生活や習俗に関心を寄せる人々から多角的な検討を要するであらう。

(東京大学出版会刊 価八、〇〇〇)